



さらしな の 里



友の会だより

第26号

2012・春



お魂入れの儀式。死後最初の審判、初七日に現れるのが不動明王で、左奥に釈迦如来、文殊菩薩の岩が続く

復元された冠着山の十三仏

冠着山に十三仏という信仰空間が、かつてあったことが明らかになりました。明治時代の地図の、児抱岩と坊城平との間の谷筋に、「十三仏」と明記されています。十三仏は死者が冥途への途中にかけられる回忌ごとの審判（裁判）の弁護士のような立場の仏様のことです。昔の人達は自然や神仏との一体感が強く、神仏に畏敬の念と強い信仰心を持っていたので、そんな時代に崇拝されていたものと思われま

す。「十三仏」の下には坊城平があります。坊城平という地名には修験者の修行の拠点という意味合いがあります。児抱岩の周辺に鎖場があったことを記憶している人もいますので、坊城平から出発して十三仏を拝み、児抱岩の鎖場を登って冠着山の頂上に至るルートはかつての修験者の修業の場であった可能性もあります。しかし、この十三仏は、時代が変わり、お守りする人がいなくなったため、自然の中にお隠れになってしまいました。

復元と保存の機運が地元有志によって盛り上がったのは昨年、地元文化団体「更級人風月の会」の特別企画「冠着山の十三仏探訪」の実施がきっかけでした。そして、今年になって、「冠着山十三仏復元と保存の会」が結成され、5月19日には復元活動が行われました。この山は、地元財産区の管理下にあり、地元住民の入会山でもありますので、財産区の委員さんや地元区民を代表する区長さんにも立ち会っていただきました。児抱岩周辺の地形的特色を活かして、突起した十三の岩をそれぞれ仏様に見立て、仏名を標記し、僧侶による魂入れ、という方法で行いました。

復元された十三仏は、坊城平の鳥居から冠着山頂への登山道を百ほど進んだ左側にあります。設置した「冠着十三仏」の標識から少し入った所に、一番目の不動明王の岩があり、頭上には児抱岩が見えます。これからは登山者を見守ってくださるものと思われま

す。法要の際の弁護の嘆願に訪れる人も現れるかもしれません。さらしなの象徴たる冠着山に、これから多くの旅行者や登山家が訪れることでしょう。その時、この十三仏が癒しの拠り所となり、現代風に言えばパワースポットとなることを期待してやみません。

（冠着山十三仏保存会事務局・上水清 羽尾五区）

地域と子どもを育ててきた



参加者(さらしな事務所より右から)
 塚田克己さん(誌上参加、写真右上)
 (さらしなの里友の会文化部長)
 内山悟子さん
 (更級小PTA6年役員)
 森 晴美さん
 (更級小PTA6年役員)
 柴田洋一さん
 (さらしなの里歴史資料館職員)
 小島 豪さん
 (更級小教諭)
 島谷 守さん
 (更級小「おやじの会」代表)
 司会・大谷善邦
 (友の会より編集委員)



自身を楽しむためにどうすればいいか考えることが必要ではないか。住民が楽しむには来場者が大人数である必要はないと思う。最初はおにぎりも自分たちでつくった。今は忙しくなりすぎた感じがする。

内山 大勢呼ぶと、もてなす人も必要。地元住民が楽しむのが大事で、そこに子どもが参加するのがいい。

小島 そう考える人が育つてくれる場になるといい。

柴田洋一 芸能村は今、忙しくて見られない人もいる。

内山 その時間は係の仕事は中止して見に行くくらい余裕があるといい。

小島 おまつりの理想は「育ちの場」。なかなか会えない地域の年配の人とコミュニケーションすることで教えてもらい、年配者も元気をもらおうという相乗効果が生まれる場が縄文まつり。

森 20回目の企画としてスタン



全部すれば縄文マスター。

司会 面白い。誰が役を担うか。

島谷 基本はやりたいと思う人。学校とかPTAという組織でなくて有志でもいい。気の合う仲間。来年も続けるかどうかは気にせずやってしまおう。

塚田 縄文まつりが子どもたちの思い出になり、郷土愛につながるとうれしい。

内山 地域の人々が触れ合うチャンスを与えてくれる場でもある。声をかけてくれれば協力してくれる父母もいる。かわつていないと良さが分からない。子どもが3、4年生になると良さが分かって

さらしなの里縄文まつり。さらしなの里歴史資料館・古代体験パークの開館に合わせ始まった。運営母体は「手間と物を惜しまない」(故塚田哲男さん)住民で構成する「さらしなの里友の会」(現会長、豊城殿さん)。最初は更級小の古代体験クラブなど限られた児童の参加だったが、2006年からは全学年が参加する行事に。まつりの始まりをアナウンスする鼓笛行進や山・川の恵みに感謝する豊饒儀礼、縄文体験各コーナーなど、学年ごとにまつりを運営する役割を担う。10回の節目にアフリカの民族音楽ジャンベのコンサート、15回の節目には「里と人にいやされるさらしな 縄文からのメッセージ」を記念出版した。

さらしなの里縄文まつり20年

新たな10年に向け 関係者座談会

さらしなの里縄文まつりがことしの秋、第20回を迎えます。地域を愛する住民主導のまつりとして内外で高い評価を得てきました。地元の更級小学校も運動会と同じように学校を挙げての参加行事と位置付けるようになりました。将来を担う子どもたちの育成がまつりの主眼でもあることから、子育てに関わるみなさんを中心に、新たな10年のあり方を語り合う座談会を3月、開きました。

6年かけ親子で地域学習

司会(大谷善邦) これまでのおまつりについてご意見を。

小島豪 縄文まつりは子どもたちが地域に学ぶということなので、とてもいいことだと思う。

島谷守 1年生からいろんな自然や人と触れ合う体験をして6年になって卒業、その過程に親もかわるというのはずばらしい。

塚田克己 私は1回目からかわつていくが、さらしなの里友の会初代会長の大谷秀志さん(故人)の「こないないところだからまつりでもやろうじゃないか」という一言から始まった。地域の子どもの健全育成も大きな目的で、更級小の全校参加でそれが実ったとも言える。副会長の塚田哲男さん(故人)が「手間と物を惜しまないのが友の会」と言っていたように、本当に多くの皆さんがボランティアで関わってくれた。前日の準備が大変で、更級小



PTAの人たちも参加してくれるようになったのはありがたい。

内山悟子 最初はおまつりを楽しみに来ているというよりは子どもを迎えに来ている感じだった。でもひと通り見て回っているときにイワナの手づかみ体験コーナーで「うちの父ちゃん、魚のはらわた出せるんだ」と感心している子がいるのを見かけ

支える住民が楽しんでこそ

た。親子がお互いを見直しあう光景がいろんなコーナーであるといい。

小島 私は去年、4年の担任で、芸能村の寸劇を子どもたちに作らせた。子どもたちも表現することを楽しんだのだろう、達成感がとてもあった。

森晴美 私の子どもも4年生だったが、やりきった満足感があるようだ。

内山 親は与えられた役割をこなしている感じが強い気がする。自分たちで楽しもうという発想がもつとあるといい。

塚田 縄文まつりは最初のころ、「こんなことやったらどうだい」「ああやったらどうだい」とみんな話してあつてメニューが増えていった。それが面白かった。



基本はやりたいと思う人

司会 新たな10年に向けて何が必要だと思うか。

小島 子どもたちがこのおまつりでもっと縄文人になればいいと思う。今は学年ごとに言われたことをやっている感じで主体的になっていない。3年生ぐらいまではおまつりを存分に楽しんで、芸能村をやる4年生からは「何かを発表したいな」と自分で思うようになればいい。縄文まつりが表現したいものを追求していくスタートになればいい。

司会(大谷) 私は6回目ぐらいのおまつりから参加しているが、まつりを支えるスタッフの疲労感が大きい気がする。もう一度、スタッフ

きて、それを伝えることの大事さも分かる。

島谷 手づくり、自主参加でやるのが一番。20年目の節目に少しチャレンジがあるといい。10年後を目標にタイムカプセルを埋め込み次の世代に託すとか。

司会(大谷) 指導要領の改訂で総合学習の時間が減り、更級小学校はこれまでのように縄文まつりの事前学習にたつぷりとは時間が使えなくなるようです。自主的にやってきたサツマイモやねぎの栽培の取り組みも見直しが必要なようです。本日はありがとうございました。

さらしなの里縄文まつり。さらしなの里歴史資料館・古代体験パークの開館に合わせ始まった。運営母体は「手間と物を惜しまない」(故塚田哲男さん)住民で構成する「さらしなの里友の会」(現会長、豊城殿さん)。最初は更級小の古代体験クラブなど限られた児童の参加だったが、2006年からは全学年が参加する行事に。まつりの始まりをアナウンスする鼓笛行進や山・川の恵みに感謝する豊饒儀礼、縄文体験各コーナーなど、学年ごとにまつりを運営する役割を担う。10回の節目にアフリカの民族音楽ジャンベのコンサート、15回の節目には「里と人にいやされるさらしな 縄文からのメッセージ」を記念出版した。

縄文人も体験した大地震、地滑り

さらしなの里歴史資料館で3月20日、明徳寺住職で信州大名誉教授（地震学）の塚原弘昭さんが「長野盆地ができるーそのとき縄文人は」と題して講演しました。概要について塚原さんに寄稿してもらいました。（塚原さんは「さらしなの里友の会」の文化部副部長です）



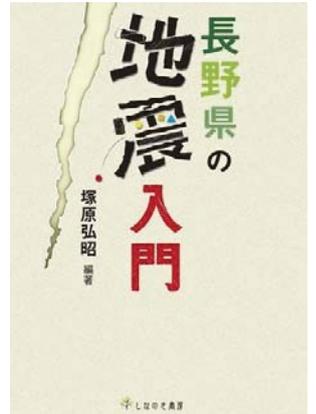
さらしなの里歴史資料館で講演する機会をいただきました。およそ30万年前に、千曲市稲荷山付近から飯山市に達する1本の大断層が活動を開始し、その結果、長野盆地がつくられたという話をいたしました。

この活断層は、およそ千年に1回ずれ動き、大地震を起こすだけだけでなく、断層の東側を沈降させて盆地を作ってきました。活断層の周辺やへりには、茶臼山や姨捨地域のような地滑り地帯がつくられました。

5千年前、この地に生活していた縄文人は、大地震だけでなく、地滑りの被害にもあつていたに違いありません。この活断層は、今後、数十万年は活動を続けることでしょう。ここに住む私たちは、縄文人と同じ災害を受け入れて生きていかねばなりません。

この活断層の活動で生まれた姨捨の地滑り地域は、美しい棚田の景観で知られています。尾根に刻まれた棚田のはるか下方に千曲川が流れ、長野盆地が広がっている風景は、ほかの棚田風景にはないものです。尾根に水田ができたのは、水が漏れず、美味しい米ができる粘土質の栄養豊かな尾根だからです。

普通の山では、谷に水田は作れますが尾根にはできません。地滑り地帯で、土石流が発生し、何本かの尾根ができ、その上に



棚田ができています。地滑り地帯、土石流、背景の長野盆地とそこを流れる千曲川、これらの風景はみんなこの1本の、嫌われ者の活断層の活動によってつくられたものです。その自然に向かつて、この地に生きてきた先祖が智慧をだしあい、たゆまず働いたその結果が、現在の棚田の景観だと思えます。

（長野県内で起きた大地震の概要とメカニズムなどを平易に解説する塚原さんの著書「長野県の地震入門」が好評です。書店などで販売しています）

「さらしな」という地名が世界文化遺産級の地名であることを明らかにする本「地名遺産さらしな 都人のあこがれ、そして今」がさらしな堂から刊行されました。現在の千曲市域が古来「月の都」として京都の貴族たちのあこがれの場であったのは、「さらしな」という純白をイメージさせる地名の響きが大きく関係しています。A5判112ページ、フルカラー、千円です。さらしな堂（旧大谷商店）のほか、さらしなの里歴史資料館、佐良志奈神社などで販売しています。

資料館だより



冠着山に雪が残る4月1日、着任しました山崎と申します。私は旧更埴市八幡の生まれで幼少期から、冠着山を眺めて育ちました。八幡小学校の校歌は、仰ごうよ青空に冠着の峰美しくと始まります。

今までにこの山へは2回登山をしました。最初は小学5年生で、地区の育成会での大人の引率でした。この時は疲れた記憶があります。2度目は社会人となってから麓まで車で行ったので疲れはありませんでした。頂上からの善光寺平への眺望は感動モノでした。この麓の歴史ある地で働くことをうれしく思います。

地域の皆様のご指導をいただきながら当館が千曲市、県内外の方々に親しんでもらえるように努めます。新しいもう一人のスタッフ、岡田啓子ともどもよろしく願い申し上げます。

〔編集後記〕さらしなの里縄文まつりが今秋、20回となるのを記念する関係者座談会は、まつりの在り方をさらに発展させるヒントがたくさん盛り込まれたものとなりました。課題もありますが、地域と子どもを育てるまつりであり続けてほしいものです。▽十三仏のある空間はとても独特です。訪ねれば実感できます。埋もれてしまっているさらしなの里の宝を今後も発掘していきたいと思えます。

編集・発行

さらしなの里友の会より編集委員会

事務局・さらしなの里歴史資料館

〒三八九・〇八二一

長野県千曲市大字羽尾 四七の一

電話 〇二六（二七六）七五一一

Fax 〇二六（二六二）四一六一